2021/12/12
ヨハネの手紙第一　講解メッセージ③
『弁護する方がいる』Ⅰヨハネ 2:1-2

■「御父の前で弁護する」とは

「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。」（Ⅰヨハネ 2:1）

イエス・キリストは、罪を犯した私たちを弁護すると言われますが、私たちが犯す「罪」とは、何なのでしょうか。

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:8-9）

罪とは、「私には罪はない」と言うことです。神は、私たちがどんな罪人であっても、悪からきよめてくださいます。「悪」を一言で表現するなら、「神を愛さないこと」です。つまり、悪からきよめられるとは、神を愛する者になるということです。どうやったら神を愛する者になれるのか、それは罪が赦されることによります。聖書が教えているのは、自分が罪人であることを認めて告白し悪からきよめられるという、光の中を歩む生き方です。

しかし、私たちは罪を言い表して悪からきよめられた後も、繰り返し罪を犯してしまいます。私たちは、そんな自分を情けなく思い、自分を責めてしまうものですが、御言葉は、それでも神は私たちを弁護して助けてくださるから安心しなさいと教えています。それは、神が私たちの土台であり、私たちを背負っており、共に生きておられるからです。だから神は、私たちが罪を犯したとしても、なんとしても私たちを苦しみから贖い、助けようとしてくださるのです。

さて、「私たちを御父の前で弁護する方がいる」とありますが、この「前で」と訳されているギリシャ語は「プロス」という言葉で、「かたわら」すなわち英語では「with」という意味のことばです。つまり、罪を犯してしまう私たちを、イエス・キリストは父なる神と一緒になって弁護してくださるという意味なのです。

「御父の前で」という言葉から、私たちの罪を怒り、あるいは悲しむ御父の前で、義なるイエス・キリストが十字架に架かり、私たちの罪を贖い、罪の罰を代わりに受けて、どうぞ赦してあげてくださいと父なる神をなだめているというイメージが浮かびがちですが、実際はそういうことではありません。

■「なだめの供え物」

「この方こそ、私たちの罪のための――私たちの罪だけでなく、世全体のための――なだめの供え物です。」（Ⅰヨハネ 2:2）

「なだめの供え物」と訳されている言葉は、「ヒラスモス」という言葉です。「ヒラスモス」とは、契約の箱のふたのことです。契約の箱とは、モーセが神から受け取った十戒が刻まれた石板を収めた箱で、そのふたにはケルビムという天使が二体載っています。このふたは、神は律法を与えて私たちに罪を指摘すると同時に私たちを贖ってくださるということを象徴的に教えるもので、「贖いのふた」と呼ばれています。

「また、純金の『贖いの蓋』を作る。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半。槌で打って作った二つの金のケルビムを『贖いのふた』の両端に作る。一つのケルブは一方の端に、他のケルブは他方の端に作る。ケルビムを『贖いのふた』の一部としてそれの両端に作らなければならない。」（出エジプト 25:17-19）

「贖いのふた（ヒラスモス）」は、「贖う」という言葉から派生した名詞です。ですから、辞書には「贖い者、贖罪者」と記されています。つまり、Ⅰヨハネ 2 章 2 節を、忠実に訳すと、「この方こそ、私たちの罪のための――私たちの罪だけでなく、世全体のための――贖罪者です。」となります。

つまり、「ヒラスモス」は、弁護する方という言葉の言い換えです。なぜこの言葉を「なだめの供え物」と訳したのでしょうか。それは、キリストの十字架をどのように解釈するかという背景によるものです。

なぜ、イエス・キリストは十字架に架かられたのかについて、2000 年間、さまざま論争がありました。当初主流だったのは、悪魔の捕虜となった人間のために、イエス・キリストがご自身のいのちを身代金として差し出したので、悪魔は人間を解放してくれたという説です。つまり、イエス様の十字架は悪魔に対して支払われたことになりますが、そんなおかしなことはあり得ません。

次に、10 世紀ごろ、アンセルムスという人が、父なる神は聖なる方であり、罪には罰をもって報いるが、人間にはその罰を支払うことができないため、イエス・キリストが十字架で、人の受ける罰を代わりに受けてくださったという説を唱えました。十字架によって父なる神様はなだめられ、私たちの罪は赦されるというアンセルムスの説は、父なる神を満足させるという意味で、満足説と呼ばれます。「なだめの供え物」という訳は、このような立場に立って訳されたものです。

しかし、父なる神は罪に対して怒り、イエス様が「赦してください」と頼むという構図は、三位一体の神の本質に矛盾します。それなのに、未だこの説を支持する人が大勢います。それは、私たちの中にある人間的な物差しのせいです。私たちのこの世界は、罪を犯したら罰を受けなければならないという常識があります。私たちは自分が罪人であることがわかって

いますから、自分は罰を受けなければならないのだと考えます。そこで、イエスさまが自分の罰の身代わりとなってくださったのだと考えるわけです。しかし、これは人間的な標準によるものです。私たちが人間的な標準で神の思いを知ろうとすると、誤った解釈に陥ってしまうのです。

パウロはクリスチャンを迫害していましたが、イエス・キリストを信じるようになり、自分の迫害が間違いであったことに気づきます。彼は、なぜ自分が過ちを犯したのか、なぜ迫害してしまったのかを吟味し、それは、人間的な標準でキリストを知ろうとしていたからだということに気づきました。

その人間的な標準とは、「行い＝人の価値」というものです。これが「罪には罰」という考えを生みます。しかし、イエス様は、生涯一度も罪に罰を与えたことありません。イエス様は、「私は罪を犯す者を罰するために来た」とは言わず、「私は罪を裁くために来たのではない。救うために来た。」と言いました。ことあるごとに罪人を赦し、何をしても私はあなたがたを裁かないと繰り返し言われました。これに対して当時のパウロはパリサイ人でしたから、なんで勝手に罪を赦すのかと腹を立て、あれは間違った教えだと言って迫害したのです。しかし、彼はそのことを反省して次のように書いています。

> 「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」
> （Ⅱコリント 5:16）

■「罪」の理解の誤り

イエス様も、「うわべで人を裁いてはならない」と言われました。人間的標準で人を理解しようとした結果、私たちは「罪」の理解を誤りました。人間的標準では、罪を犯すのはあなたが悪い人間だからです。よって矯正するために罰を与えようと考えます。しかし聖書は、罪は病気であると教えています。死が入り込んだことで神との関係が断たれ、不安を覚えて、死の恐怖の奴隷となり、見えるものに安心を求めて、罪が生まれました。罪は死による病気です。だから「死のとげは罪」と聖書は教えているのです。そして、イエス様は、この病気をいやすために来られたのです。これが救いです。

この病気の原因は、神の愛が見えないことによる不安です。人間は神に造られたものですから、神を知っています。ところが、悪魔の仕業によって死が入り込んだため、神が見えなくなりました。神が見えないのですから、神に愛されていることも認識できません。それが不安の原因です。この不安が困難な出来事に遭遇すると、恐れとなって私たちに迫ってくるのです。私たちの恐怖は神の愛が見えないという不安に根差しています。

私たちはこの不安によって見える安心をむさぼり、自分が愛されるために生きるようになりました。神は「愛せよ」と教えていますが、自分が愛されることが優先で、とても人を愛することなどできません。これが私たちの現状であり、この状態を病人と呼ぶのです。

イエス様は罪人を病人と呼び、医者が病人を救うように、私は罪人を招くために来たと言

っておられます。つまり、神が私たちを贖う道は、私たちが神の愛が見えるようになることです。そのために、この地上に来て神の愛を知らせてくださった方がイエス・キリストです。神が私たちに掲示された神のことばとは、イエス・キリストご自身です。イエス・キリストの生涯こそが、神が啓示しておられる私たちへのメッセージです。

イエス・キリストの生涯とはどのようなものだったでしょうか。悲しむ人と共に生き、人を差別することなく、私たちを慰め励まし、責めることはなく、繰り返し「それでもあなたを愛している」というメッセージを送り続けてくださいました。あなたがどんな者であっても何をしようとも私はあなたの味方だと発信し続け、ご自分が十字架に架かる時もご自分を殺そうとする人に対して「彼らは何をしているのかわからないでいるのだから赦してあげてほしい」と祈りました。徹底的に私たちを裁かず赦し、慰めてくださいました。神は私たちのことを友と呼び、人が友のために命を捨てること以上に大きな愛はないと言われました。どれだけ私があなたを愛しているか、あなたはどれだけ神に愛されているのかを知るようになるために十字架に架かられたのです。

イエス・キリストの十字架を通して、見えなかった神の愛がみえるようになり、神の愛があきらかにされたのです。神はどんな罪人でもいやします。病気の原因は、神の愛が見えなくなったことにありますから、神の愛が見えるようになることで、私たちは癒されるのです。イエス・キリストの十字架のうち傷によって、私たちは癒されるようになったと聖書は教えています。これが贖いです。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」
>
> （ローマ 5:8）
>
> 「この方こそ、私たちの罪のための――私たちの罪だけでなく、世全体のための――なだめの供え物です。」（Ⅰヨハネ 2:2）

「なだめの供え物」とは、父なる神の怒りを鎮めるためものではなく、私たちの不安をなだめるための供え物と解釈すればよいでしょう。

イエス様の十字架は、私たちへの愛を明らかにするためのものです。この神の愛があなたの恐れを締め出します。全き愛とは十字架の愛のことです。神は、私たちの不安の原因がわかっているので、愛をもって治療にあたります。十字架の愛によって、不安から生まれる恐れや恐怖すべてをいやし、贖ってくださるのです。

> 「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」（Ⅰヨハネ 4:18）

神が私たちに愛を示すことで、私たちは贖われ、いやされるのです。つまり、神はどこまで行っても私たちを助ける方であり、贖う方であり、私たちをいやす方です。神は、どんな病でも見捨てずに適切に治療してくださる医者であるということです。

だからイエス様が、人に対しても何度でも赦すように教えているのは、何度でもあなたがたを赦すということです。だから、安心して神の前に罪を言い表し、無条件で赦されるという経験を積み上げなさい、とイエス様は語っておられます。なぜなら、多くの罪が赦された者は多く神を愛するようになるからです。これが神の福音なのです。

神は私たちに神への愛を持ってもらいたい、私たちの中に神への愛を創造したいと願っておられます。それが人への愛につながり、平和を生み出します。そのために神は私たちの罪をとにかく赦してくださいます。それが私たちを弁護してくださる方という意味です。